様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１７５７

研究課題名（和文）社会的排除の生成・維持メカニズムの解明と抑制要因の探求

研究課題名（英文）Elucidation the Generation and Maintenance Mechanisms of Social Exclusion and Exploration of Inhibiting Factors

研究代表者
浦　光博（URA, Mitsuhiro）

追手門学院大学・　・教授

研究者番号：９０２３１１８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,500,000円

研究成果の概要（和文）：社会的排除の生成・維持メカニズムの解明と抑制要因の探求のため、まず第1に、排除対象となりがちな人びとに対するスティグマ化の特徴を明らかにした。第2に、社会的排除・孤立の連鎖過程を実証的に描写した。第３に、社会的排除の抑制要因として集団・組織の環境要因、社会的な環境要因を明らかにした。第４に、孤独感や被排斥経験がダークパーソナリティを持つ者の反社会的言動に及ぼす影響について検討した。第５に、排除対象となりがちな人びとが状況によっては受容されやすく、逆に受容されがちな人びとが状況によっては排除対象となる可能性について検討した。第６に、社会的孤立・孤独の予防に資する環境要因について探索的に検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで多くの研究によって、他者との関係が奪われることによって社会的痛みや孤独感がもたらされること、そして社会的痛みや孤独感が人の心身の健康を悪化させ、社会のアノミー化を促進することなどが示されてきた。本研究ではこのような社会的排除や社会的孤立・孤独の生起・維持メカニズムの解明と抑制要因の探究に取り組んだ。社会的排除の抑制や孤立・孤独対策は現代の重要な社会課題であるが、従来の研究は排除や孤立・孤独の悪影響の抑制に力点が置かれ、排除や孤立・孤独そのものを抑制することにはあまり力点が置かれてこなかった。本研究はこの課題に取り組んだものであり、学術的意義のみならず社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：To elucidate the mechanisms that generate and maintain social exclusion and to search for inhibiting factors, we undertook several steps. First, we clarified the characteristics of stigmatization towards individuals who are often the targets of exclusion. Second, we empirically described the chain process of social exclusion and isolation. Third, we identified the environmental factors within groups and organizations, as well as social environmental factors, that inhibit social exclusion. Fourth, we examined the effects of loneliness and experiences of exclusion on antisocial behaviors among individuals with dark personality traits. Fifth, we investigated the possibility that individuals who tend to be excluded may be more likely to be accepted under certain circumstances, while conversely, those who tend to be accepted may be more likely to be excluded under other circumstances. Finally, we explored environmental factors that contribute to the prevention of isolation and loneliness.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会的排除　社会的孤立・孤独　生起・維持メカニズム　スティグマ化　排除の連鎖　抑制要因

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、社会的排除が人の心身に種々の悪影響を及ぼす過程について多面的な検討を行ってきた。それらの研究では、他者との関係や集団・組織への所属、さらには社会システムに包摂されることが、人が適応的に生活を送る上で重要な意味を持つことが一貫して示されてきた。とすれば、対人関係や集団・組織、さらには社会的制度からの排除や孤立・孤独がなぜ生じ、その状態がなぜ維持されるのかのメカニズムの解明と排除の抑制要因の探究は、人が適応的に生活する条件を整える上で重要な役割を演じる（浦，2024)。本研究課題では、このような問題意識の下、社会的排除の生成・維持メカニズムの解明と抑制要因の探究に取り組んだ。

２．研究の目的

本研究では上記の背景を踏まえ、第１の目的として、社会的排除の生成・維持メカニズムの１つとしてのスティグマ化に着目し、排除対象となりがちな人びとに対するスティグマ化の特徴を明らかにする。第２の目的として、社会的排除や社会的孤立の連鎖過程を実証的に明らかにする。第３の目的として、社会的排除の抑制要因の探究を目指す。第４の目的として、孤独感や被排斥経験がダークパーソナリティの高い人の問題行動および敵意的認知に及ぼす影響について検討する。第５の目的として、排除と受容との逆説的な関係性についての探究に取り組む。最後に第６の目的として、社会的孤立・孤独の予防に資する環境要因について探索的な検討を行う。

社会的に排除されることによって孤立し、孤独感を深めてしまった者は、社会から関心を向けられなくなる結果として、困難な状況から抜け出すことが難しくなる。そのため、排除の抑制要因の解明はもちろんのこと、排除されがちな状況にあっても、あるいは排除されがちな人びとであってもなお、孤立することのない条件とはどのようなものなのかを明らかにすることの重要性は大きい。このような観点から、上記６つの目的に沿った研究を行った。

３．研究の方法

用いられた研究方法は多岐にわたる。上記第 1 の目的に関する研究では、fMRI 実験と Web 調査を組み合わせたアプローチを用いた。第 2 から第 6 の目的に関する研究では横断的なデザインによる Web 調査、縦断的なデザインによる Web 調査を用いた。

４．研究成果

（１）　職業スティグマに関する神経表象

スティグマ化された職業は Dirty work として表現され (Hughes, 1951)、排除の対象になりやすい。またその排除的な態度は広く社会的に共有されており、抑制することは容易ではない。先行研究から、さまざまな職業従事者の情報を処理する際、職業威信やスティグマ関連の次元でカテゴリー化処理されていることが窺える。このカテゴリー化処理された否定的な評価が、Dirty work に対する排除の抑制を困難なものにしている可能性がある。社会的排除問題の根本的な解決に向けては、職業スティグマに関わる認知的処理についての詳細な理解が不可欠である。

そこで、職業スティグマに関する神経表象について、fMRI 実験と Web 実験により検討した。fMRI 実験では、犯罪記事の被害者情報に職業情報が含まれる場合、被験者がその記事を読んでいる際の脳活動パターンに Dirty work のカテゴリー処理が生じているかを fMRI により検討した。先行研究でカテゴリー化に関わることが示されている島皮質の活動 (Cikara et al., 2017) を解析し、被験者の各職業に対する脳活動パターンから非類似度行列を作成し職業マップを可視化した結果、Dirty work 関連のカテゴリーで職業情報が処理されていることが示唆された(Figure 1-A)。fMRI 実験の手続きを考慮すると、自動的に職業情報がスティグマ関連の次元でカテゴリー化されていることが窺える。さらに、fMRI 実験には参加していない被験者を対象に Web 実験を実施し、各職業に対して抱く職業威信、職業スティグマの

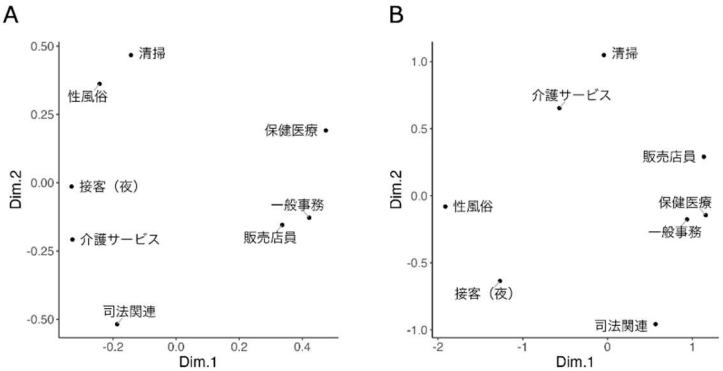


Figure 1. (A) 右島皮質の脳活動に基づく職業マップ、(B) Web 実験の主観指標に基づく職業マップ

主観的なスコアを算出し、それらのスコアから非類似度行列を作成し職業マップを構築した（Figure 1-B)。その結果、Figure 1-A と Figure 1-B は視覚的にも類似し、非類似度行列間に相関関係があることが示された（ρ = .48, p = .01)。これらの結果から、職業に対するスティグマ関連のカテゴリー処理が自動化されていることが示唆された。

（２）社会的排除・孤立の連鎖過程の検証

① 社会経済的地位と社会的弱者の受容-排除との関係

社会経済的地位と社会的弱者の受容-排除との関係について、男女 1,200 名を対象とした Web 調査によって検証した。受容-排除対象者として人生の成功者、貧困層、富裕層、高齢者という 4 カテゴリーを設けた。その上で、各カテゴリーに属する人びとをどれくらい受容または排除するかについてそれぞれ 300 名ずつの対象者に回答を求めた。それぞれの対象カテゴリーの受容の程度を基準変数、回答者の性別、年齢、幼少期ならびに現在の社会経済的地位、自分自身を「負け組」と認識するか「勝ち組」と認識するか、自分自身の人間性をどの程度高いと認識しているか（人間の本質姓と人間の独自性の 2 次元）を説明変数とする、重回帰分析を行った。分析の結果は、社会経済的地位の低さが新たな排除を生む可能性のあることを示唆していた。ただし、貧しい人びとが社会的弱者だけでなく、人生の成功者や富裕層の人びとも排除することが示されていた。このことから、社会的排除が人一般への排除傾向を高める可能性が指摘できる。

② 社会的孤立と孤立者への関心-無関心との関連

社会的に孤立している者が、自身と同様に社会的に孤立している他者に対してどの程度の関心を示すのかについて検証した。また孤立とは別に、個人の主観的な感情である孤独感が孤立者への関心-無関心に及ぼす影響も併せて検証した。全国 47 都道府県の 20 代から 60 代までの男女 2,034 名から得られた縦断データを分析した結果が Figure 2 である。Figure 2 に示されたとおり、Time1 において孤立の程度が高い者ほど Time2 における孤立者への関心を低下させていた。一方、Time1 における孤独感は Time2 における孤立者への関心を高めていた。

ここでは、孤立を機能的な面からの定義に従い、ソーシャル・サポート・ネットワークの欠如として指標化した。これは、人が利用できる資源の一つである、サポーティブな関係性からの排除を意味する。このことによって、長期的な生活史戦略に必要な資源が十分には利用できない状態となり、他者との関係性への関心を失わせることにつながったと考えられる。一方孤独感は、人が望む社会的関係の量や質と実際に得ているそれらとの間の差が大きくなるときに生じるネガティブな心理状態であり、これが高まることでむしろ他者との関係性の構築へと強く動機づけられる結果として、孤立した他者への関心が高まった可能性が考えられる。

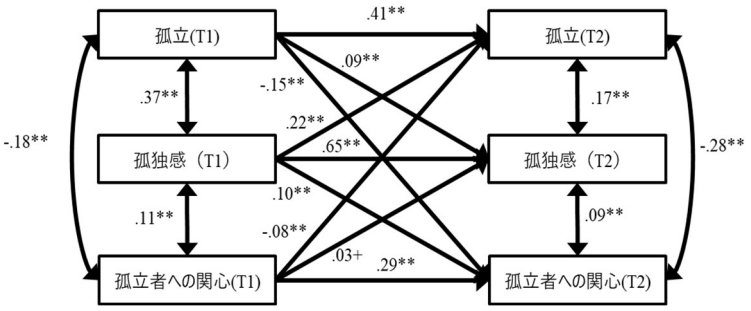
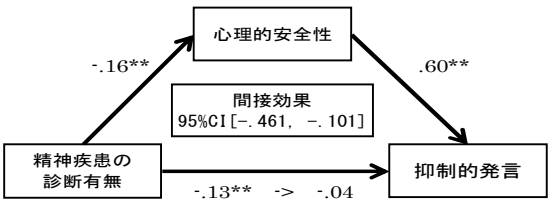


Figure 2. 孤立・孤独と孤立者への関心との関連についての縦断データの分析結果

（３）組織における排除の抑制要因としての心理的安全性の醸成

心理的安全性とは、組織やチーム内で提案や懸念を伝えるといったリスクを取ることに対して、他のメンバーが罰したり、拒絶したり、誤解したりしないという信念が共有された状態を指す(Edmondson, 1999)。心理的安全性の高さは組織やチーム内で排除やその予期が少ないことの表れと捉えられることから、心理的安全性をいかに高めるか、メンバーが発言しやすい状況をいかに作るかという問いは、排除を抑制するための組織内の取り組みを考えるうえで重要な意味を持つ。そこで、社会人調査モニターを対象に、モニターの心理的安全性の知覚と発言に対する精神疾患の既往歴と性別



Note. 図の数値は標準偏回帰係数
$^{**}p < .01$

Figure 3. 精神疾患の診断有無と抑制的発言の関連に対する心理的安全性の間接効果

の影響について検討したところ、心理的安全性ならびに有害な慣行や出来事、従業員の行動についての懸念を表現する抑制的発言(Liang et al., 2012)について、精神疾患の診断を現在受けている社員と過去に診断を受けたことのある社員の平均値がそうでない社員の平均値よりも有意に低いことが確認された。

さらに、抑制的発言において女性社員の平均値が男性社員よりも有意に低いことが確認された。これらの結果を踏まえて、精神疾患の既往歴の有無と促進的発言との関連に対する心理的安全性の媒介効果について検討したところ、有意な間接効果が認められた(Figure 3)。精神疾患の診断を受けている人ほど、心理的安全性が低いために、抑制的発言をしなくなることが想定される。精神疾患の既往歴のある社員の心理的安全性を高める取り組みのあり方を今後検討する必要がある。

（4）複数成員性の孤立予防機能

たとえば、高校や大学への入学、あるいは企業への入社は「人生の変化」に位置づく重要なライフイベントである。入学・入社に伴い、自身の対人関係が大きく変わることにより、孤立や孤独の問題が生じる可能性がある。この点に関して、Haslam(2018; 2021)は人生の変化における社会的アイデンティティに焦点をあてた Social Identity Model of Identity Change (SIMIC)を提案している。このモデルでは、人生の変化前（例、入学・入社前）に有している集団成員性の数が多いと認識しているほど、人生の変化後（例、入学・入社後）の健康や well-being が高まることを想定しており、実際にそれを支持する知見が報告されている。この知見を追証するため大学１年生を対象とした調査を行った。分析の結果得られた得点間の関連に着目すると、入学前に複数の集団成員性を有するほど、入学後の所属学科（既存集団）への帰属意識が強いこと、その意識が強いほど、well-being が高いことが示された。Haslam(2018; 2021)が指摘するように、人生の変化前に複数の集団への所属意識を有している人ほど、人生の変化におけるサポート源が確保できるという強みがあることが示唆された。

（5）孤独感や被排斥経験がダークパーソナリティを持つ者の問題行動および敵意的認知に及ぼす影響

孤独感や被排斥経験は、攻撃行動などさまざまな問題行動を引き起こす要因の１つである。本研究では、孤独感や被排斥経験が、攻撃的なパーソナリティをもつ人たちの問題行動および敵意的認知にどのような影響を及ぼすのかを検討した。まず、孤独感の程度が高 Dark Tetrad 傾向者のネット荒らしに及ぼす影響を調べた。513 名の男女を対象に Web 調査を実施した結果、Dark Tetrad の各特性が高い人ほどネット荒らしを行う傾向にあった。また、孤独を感じた頻度の多かった人ほどネットを荒らす傾向にあった。さらに、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向の高い人のうち、とりわけ孤独感の高い人がネット荒らしを行う程度が高かった。一方、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向の高い人であっても孤独感が低い場合にはネット荒らしを行わないことが明らかとなった（Masui, 2019） (Figure 4)。また、被排斥経験の程度が高 Dark Tetrad 傾向者のネット荒らしに及ぼす影響を調べた。その結果、1 ヶ月のうちに他者から排斥された経験が多かったと回答した高 Dark Tetrad 傾向者が最もネット荒らしを行うこと、Dark Tetrad が高くても被排斥経験が少ない場合にはネットを荒らしにくいことが示された（増井, 2020)。これまで述べた知見は、高 Dark Tetrad 傾向者の攻撃行動に及ぼす孤独感や被排斥経験の短期的な影響といえる。

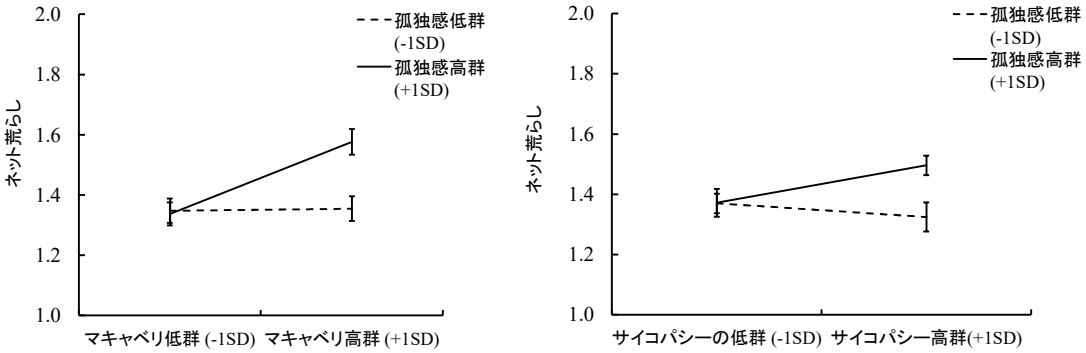


Figure 4. 孤独感が Dark Tetrad とネット荒らしとの関係性に及ぼす影響

さらに、孤独感や被排斥経験の中長期的な影響について検討した。孤独感や被排斥経験の中長期的な影響として、幼少期の環境の厳しさ（adverse childhood experiences: ACEs）に着目し

た。ACEs には、幼少期のネグレクトや家庭内の孤立、家族間の不和が含まれており、成人してからの問題行動（アルコール依存や犯罪）の要因の１つとされている（Burke et al., 2023)。そこで、ACEs の程度が Dark Tetrad の高い人のネット荒らし行動に与える影響を調べた。447 人の男女を対象として Web 調査を実施した結果、ACEs の高い人ほど、また、Dark Tetrad の高い人ほどネット荒らし行動を行いやすいことが明らかとなった。加えて、サイコパシー傾向およびサディズム傾向の高さがネット荒らしに与える影響には、ACEs の程度が関与していた。すなわち、ACEs と Dark Tetrad の両方が高い人は、いずれかのみが高い人や、両方が低い人に比べてネット荒らしを行いやすかった（Masui, 2023)。

（６）受容と排除の逆説的な関係

集団や組織においてインサイダーであるがゆえに受容されやすく、アウトサイダーであるがゆえに排除されやすい、というわれわれの直感的な理解は常に正しいとは限らない。それぞれの立場の者が逸脱的な行動をとった場合には、この直感的な理解とは逆の結果が生じる可能性がある。このような逆説的な関係性について、社会人を対象とした調査によって検討した(浦,2021)。

全国の 20 代から 50 代までの会社員、もしくは会社役員 1093 名（男性 714 名、女性 379 名）を対象とした Web 調査によって得られたデータの分析結果は、予測を支持していた、逸脱的な行動をとる転職者がインサイダーである場合の方が、アウトサイダーである場合よりも強く排除されることを示していた(Figure 5)。また媒介分析を行ったところ、有能なアウトサイダーが受容される過程はその人物が組織風土の改革者であるとの認識が媒介していた。

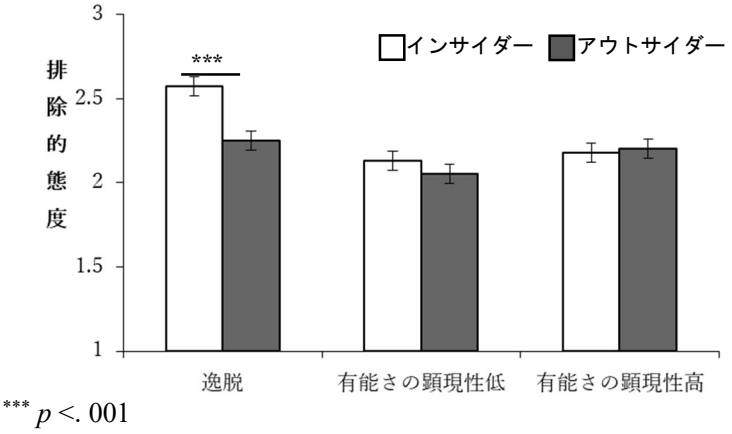


Figure 5.　転職者の属性と仕事上の態度・有能さが排除的態度に及ぼす効果

（７）社会的孤立・孤独の予防に資する環境要因

社会的孤立・孤独が人の心身ならびに社会に及ぼす影響の大きさからその軽減や孤立・孤独状態からの回復に関する研究は数多く行われてきたが、そもそも人びとが孤立・孤独状態に陥る前にそれを予防する一次予防に関する研究は少ない（Crowe, et. al, 2024)。とりわけ、孤立・孤独の社会的・集団的リスクの軽減を目指す取り組みは不十分である（Umberson, & Donnelly, 2023)。しかし、古典的な社会的ネットワーク研究や社会的痛み研究、ならびに関係流動性に関する研究から、人びとが自らの対人関係を柔軟に構成-再構成できる条件があることで、孤立・孤独を未然に防ぐことができる可能性が指摘できる。そこで、全国 47 都道府県の 20 代から 60 代までの男女 10,000 名を対象とした Web 調査によって、この可能性を検証するとともに、どのような地域特性が人びとの孤立・孤独の抑制に関わっているのかを探索的に検討した。

分析の結果、まず個人レベルでも地域レベルでも関係流動性の高さが孤立の低さと関連することが示された。また、地域特性としては、各都道府県別の転入超過率が関係流動性を媒介して孤独感を低下させていた（Figure 6-A)。また、各都道府県の就業異動率が関係流動性を媒介して孤立を低下させていた（Figure 6-B)。

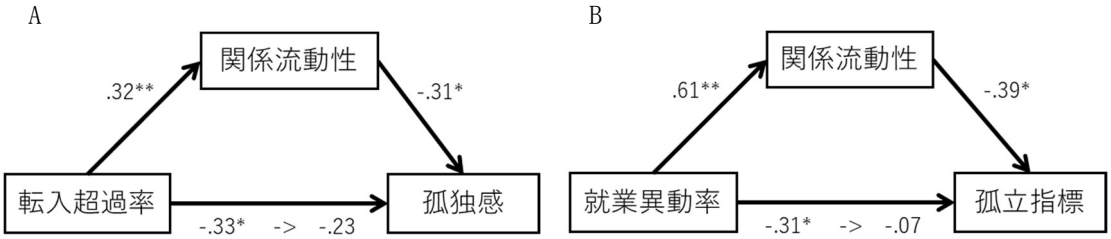


Figure 6.　地域特性と孤独感・孤立との関係における地域の関係流動性の媒介効果

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 Lee S., Shimizu H., Nakashima K.	４．巻 online first
２．論文標題 Shift‐and‐Persist Strategy: Tendencies and Effect on Japanese Parents and Children's Mental Health	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Japanese Psychological Research	６．最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12421	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Abe N., Nakashima K.	４．巻 35
２．論文標題 Examination of the determinants affecting over-adaptation	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Health Psychology Research	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11560/jhpr.201225146	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Shimizu, H., Takahashi, C., Koike, M., Fukui, K., & Nakashima, K.	４．巻 65
２．論文標題 How do Changes in One’s Self-esteem Affect the Self-esteem of Others?	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Japanese Psychological Research,	６．最初と最後の頁 66-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12350	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 浦　光博	４．巻 735
２．論文標題 インサイダーゆえの排除、アウトサイダーゆえの受容	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本労働研究雑誌	６．最初と最後の頁 48-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yoshida, T. & Ura, M.	4．巻 13
2．論文標題 Loss of Control over Addictive Behaviors Mediate the Effect of Social Exclusion in Addiction	5．発行年 2021年
3．雑誌名 International Journal of Psychological Studies	6．最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5539/ijps.v13n1p27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Abe, K., & Nakashima, K.	4．巻 41
2．論文標題 Excessive-reassurance seeking and mental health: Interpersonal networks for emotion regulation	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Current Psychology	6．最初と最後の頁 4711-4721
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-020-00955-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yanagisawa, K., Kashima, E. S., Shigemune, Y., Nakai, R., & Abe, N.	4．巻 2
2．論文標題 Neural representations of death in the cortical midline structures promote temporal discounting	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Cerebral Cortex Communications	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/texcom/tgab013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 浦 光博	4．巻 63
2．論文標題 ダークなパーソナリティは社会の向社会性の維持・向上に寄与するのか	5．発行年 2020年
3．雑誌名 心理学評論	6．最初と最後の頁 433～437
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24602/sjpr.63.4_433	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中島 健一郎	4．巻 63
2．論文標題 排斥研究から人のつながりを考える	5．発行年 2020年
3．雑誌名 心理学評論	6．最初と最後の頁 183～191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24602/sjpr.63.2_183	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Masui Keita	4．巻 214
2．論文標題 Interactional effects of adverse childhood experiences, psychopathy, and everyday sadism on Internet trolling	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Personality and Individual Differences	6．最初と最後の頁 112327～112327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.paid.2023.112327	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 浦　光博	4．巻 印刷中
2．論文標題 社会的孤立・孤独の軽減と予防 ―一次予防研究の展開に向けて―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 医療と社会	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小川 詩音、李 受珉、中島 健一郎	4．巻 23
2．論文標題 誰が組織内での発言をためらい，心理的安全性を低く感じるのか ： 社会人調査モニターの性別・国籍・障害の有無に着目して	5．発行年 2024年
3．雑誌名 広島大学心理学研究	6．最初と最後の頁 21～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/55055	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上田 寛、朝倉 智大、大前 杏織、佐藤 寛、中島 健一郎	４．巻 22
２．論文標題 大学生アスリートの心理的安全性がバーンアウトにおよぼす影響 ： 競技不安と心理的競技能力を介して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 広島大学心理学研究	６．最初と最後の頁 157～172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/53688	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計28件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 柳澤邦昭
２．発表標題 神経表象による職業スティグマの可視化
３．学会等名 第12回社会神経科学研究会「社会神経科学研究の今後の展開に向けて」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Imada, N., Abe N., Nishimura, Y., & Nakashima, K.
２．発表標題 Examination and Reconcideration of Over-adaptation.
３．学会等名 The 24th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Lee, S., & Nakashima, K.
２．発表標題 Influences of Parental Shift-and-Persist Strategy on Children’s Shift-and-Persist strategy Trajectories.
３．学会等名 The 24th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ueda, H., Asakura T., Omae A., Sato H., & Nakashima K.
２．発表標題 he Influence of Psychological Safety on Burnout in College Athletes: via Competitive Anxiety and Psychological Competitive Ability.
３．学会等名 The 24th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 上田 寛・朝倉智大・大前杏織・佐藤 寛・中島健一郎
２．発表標題 心理的安全性が大学生アスリートに及ぼす影響についての探索的検討―競技不安・バーンアウト・心理的競技能力との関連―
３．学会等名 日本スポーツ心理学会第47回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大塚萌笑・中島健一郎
２．発表標題 SIMIC モデルの検証ー新入生の人生の変化に関わる集団の変容と精神的健康に着目してー.
３．学会等名 中国四国心理学会第78回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 神原広平・加藤樹里・戸谷彰宏・阿部夏希・李 受珉・重松 潤・清水陽香・中島健一郎
２．発表標題 年の孤独感に対する友人とのオンライン交流の影響: Directed Acyclic Graphicの推定.
３．学会等名 日本心理学会第86回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 柳澤邦昭，八田紘和，中井隆介，杉浦仁美，阿部修士
２．発表標題 職業スティグマに関する神経表象 DISTATIS による検証
３．学会等名 日本社会心理学会第63回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 増井啓太
２．発表標題 Dark Triad が新型コロナウイルス感染症患者への偏見的態度に及ぼす影響－内在的公正推論による調整効果の検討
３．学会等名 日本社会心理学会第63回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Nishimura, Y., Shimizu, H., & Nakashima, K.
２．発表標題 Effects of Parental Attitudes on Child's Depression, Autonomy, and Carrier Consciousness: Using Parents-Child Correlational Data.
３．学会等名 The 33rd Annual Convention of Psychological Science.（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Xie, X., & Nakashima, K. A
２．発表標題 Proposed Process from Attachment Anxiety to Physical Aggression: From the Perspective of the Escalation Theory of Domestic Violence.
３．学会等名 The 33rd Annual Convention of Psychological Science.（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 増井啓太
２．発表標題 二分法的思考と社会的排斥がネット荒らしに及ぼす影響
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 増井啓太
２．発表標題 Dark Triadと孤独感が社会階層の低い人へのスティグマ的態度に及ぼす影響
３．学会等名 日本社会心理学会第62回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 柳澤邦昭・中井隆介・浅野孝平・阿部修士
２．発表標題 子供が仲間はずれにされている際のこころの痛み-母親を対象としたfMRI実験による検証.
３．学会等名 日本社会心理学会第62回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 浦　光博
２．発表標題 人間中心社会を創るのは誰？（2）
３．学会等名 日本社会心理学会第61回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 増井啓太
２．発表標題 被排斥経験が Dark Tetrad とネット荒らしとに及ぼす影響
３．学会等名 日本社会心理学会第61回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 柳澤邦昭・中井隆介・杉浦仁美・八田紘和・阿部修士
２．発表標題 世界の認知構造を符号化する神経表象－表象類似度解析による検証－
３．学会等名 日本社会心理学会第61回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 寺垣内雅子・中島健一郎
２．発表標題 集団への所属意識とキャリア意識に対する自己肯定感の効果
３．学会等名 日本社会心理学会第61回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 野間紘久・重松 潤・中島健一郎
２．発表標題 抑うつの認知的脆弱性の適応的側面について―ストレスフルイベントに着目して―
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Masui, K.
２．発表標題 The relationship between spitefulness and Internet trolling: The moderating effect of adverse childhood experiences.
３．学会等名 Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 小川詩音・中島健一郎
２．発表標題 チームの属性構成が個人の心理的安全性風土知覚に与える影響
３．学会等名 中国四国心理学会第56回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 大塚萌笑・中島健一郎
２．発表標題 Social Identity Model of Identity Changeの検証－新入生の人生の変化に関わる集団の変容と精神的健康に着目して－
３．学会等名 北陸心理学会第58回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 上田 寛・朝倉智大・大前杏織・佐藤 寛・中島健一郎
２．発表標題 大学生アスリートの心理的安全性がバーンアウトに及ぼす影響－競技不安と心理的競技能力を介して－
３．学会等名 日本社会心理学会第63回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 上田 寛・中島健一郎
２．発表標題 アスリートにおける心理的安全性の効果検証－先行要因としての　サーバント・リーダーシップに着目して－
３．学会等名 日本社会心理学会第64回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 上田 寛・中島健一郎
２．発表標題 アスリートに対する心理的安全性の効果に関する探索的検討－サーバント・リーダーシップの調整効果に着目して－
３．学会等名 日本心理学会第87回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 上田 寛・中島健一郎
２．発表標題 アスリートのメンタルヘルスに対する心理的安全性の効果検証－心理的安全性の先行要因・競技特性の違いに着目して－
３．学会等名 日本スポーツ心理学会第50回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 柳澤邦昭
２．発表標題 社会神経科学2.0への誘い
３．学会等名 日本心理学会第87回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 浦　光博
２．発表標題 どのような地域で生活すれば孤立・孤独に陥らないで済むのか
３．学会等名 日本社会心理学会第65回大会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計3件

１．著者名 小野田慶一・白砂大・増井啓太・櫻井鼓・宮川裕基・益田啓裕、川口　潤	４．発行年 2023年
２．出版社 追手門学院大学出版会	５．総ページ数 116
３．書名 心とは何か	

１．著者名 増井啓太（綿村英一郎・藤田正博・板山昴・赤峰亜紀（編））	４．発行年 2022年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 318
３．書名 入門　司法・犯罪心理学（第2章　犯罪の整備津学的要因、第3章　犯罪の心理的要因）	

１．著者名 増井啓太（有光 興記（監）飯田沙依亜・榊原良太・手塚洋介（編））	４．発行年 2022年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 432
３．書名 感情制御ハンドブック：基礎から応用そして実践へ（第9章　衝動性と感情制御）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中島　健一郎 (NAKASHIMA Ken'ichiro) (20587480)	広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授 (15401)	
研究分担者	柳澤　邦昭 (YANAGISAWA Kuniaki) (10722332)	神戸大学・大学院人文学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	増井　啓太 (MASUI Keita) (00774332)	追手門学院大学・心理学部・准教授 (34415)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関